

戊辰150年企画

# 戊辰戦争

## 二本松の戦い

「一藩こそぞって身命を擲ち、

斃<sup>たお</sup>れてのち已<sup>や</sup>むまで戦い抜き、

武士道の精髓<sup>せいずい</sup>を尽くしたのは

「二本松をもって最上とする」

戊辰戦争二本松の戦いにおける、新政府軍の隊長(参謀)板垣退助(土佐藩士)は、実際に二本松に攻め入ります。二本松藩士たちの戦いぶりを目の当たりにした板垣参謀は、戊辰戦争後に二本松藩をこう評しました。(「板垣退助君伝」参照)

慶應4（1868）年7月29日の正午前。ついに二本松城は炎上落城しました。二本松藩が新政府軍との徹底抗戦を決した老臣会議からわずか2日後のことでした。

隣国三春藩の奥羽越列藩同盟からの離脱もあり、そして藩の軍事總裁家老の丹羽丹波率いる頼みの主力部隊は白河の戦いから未だ戻ることができないという状況下でのことです。猛烈な勢いで二本松城下になだれ込む新政府軍に対し、急ぎよ動員された藩兵には、老人、少年、農民も数多く動員されており、旧式の銃、槍、刀で新政府軍と戦う様子はあまりにも哀れで、玉砕と言ってもよい無残な結末を迎えました。

戊辰戦争における二本松藩の対応を二本松市史では次のように断じています。

「二本松藩は戊辰の戦乱の主導権も握られないままに、奥羽越同盟の最前線として兵火の災いを最も多く被り、領内を焦土と化し、領民を苦難の途に投じたのみであったことと、犠牲の大きさを銘記しなければならぬ。」

一方、二本松の戦いの様子をつぶさに見ていた新政府軍の隊長（参謀）である板垣退助は、二本松藩の戦いぶりに武士としての美徳を感じ、次の言葉を残しています。

「一藩ごぞつて身命を擲ち、斃れてのち己むまで戦い抜き、

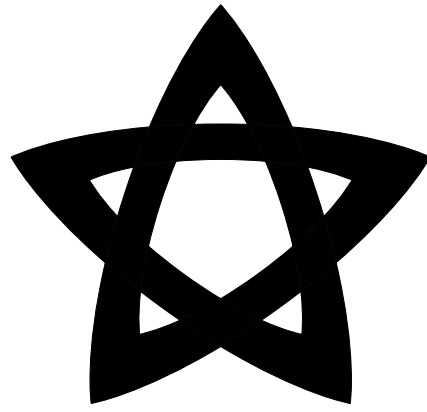
武士道の精髓を尽くしたのは二本松をもって最上とする」

新政府軍の隊長とはいえ板垣退助も土佐藩（現在の高知県）の武士。その思考の根源には、時代の流れとはいえ、徳川幕府と行動を共にすると思われるいた親藩、譜代大名が、戦わずして次々に新政府軍に恭順、降伏する姿に憤りを感じていたのかもしれない。

戊辰戦争において、二本松藩は単に激しく戦っただけではなく、『城を枕に討ち死に』しました。これは、城郭が焼け落ち、首脳部が自刃し、兵の多くが死傷して敗戦に至ることを言い、武士道においては、敗者側のとりうる最高の選択肢とされていました。慶長20（1615）年に起きた大坂夏の陣以降、城を枕に討ち死にした藩は、日本六十余州全三百余藩の中で、二本松藩だけでした。

戊辰戦争から150年。今月号は戊辰戦争における二本松の戦いを振り返ります。

# 奥羽越列藩同盟



上は奥羽越列藩同盟の旗印。旗には黒地のものと白地のものがある。

## 奥羽越列藩同盟加盟31藩(黒網掛け部分が福島県内の藩)

仙台(62万5千石)・米沢(15万石)・盛岡(20万石)・秋田(20万石5千石)・弘前(10万石)・二本松(10万700石)・守山(2万石)・棚倉(6万4千石)・相馬中村(6万石)・三春(5万石)・山形(5万石)・福島(3万石)・上ノ山(3万石)・亀田(2万石)・一ノ関(3万石)・矢島(8千石)・松前(3万石)・平(3万石)・本庄(2万2千1百石)・泉(2万石)・湯長谷(1万5千石)・下手渡(1万石)・新庄(6万8千2百石)・八戸(2万石)・天童(2万石)・新発田(10万石)・村上(5万9千石)・村松(3万石)・三根山(1万1千石)・長岡(7万4千石)・黒川(1万石)

## 慶

應4(1868)年  
5月6日。新政府

軍への攻守同盟「奥羽越列藩同盟」が成立しました。もともとこの同盟は、

新政府軍に会津藩の救済を求めるとともに

奥羽諸藩の同盟でしたが、

一つの事件がこの同盟の

結成主旨を変えたとともに

に、東日本全土を巻き込

んだ大戦争への引き金を

引いてしまいました。

同年閏4月19日に起き

た、奥羽鎮撫総督府下参

謀であった世良修蔵の

暗殺事件です。

## 奥

羽諸藩は、会津藩救済のために同盟

して嘆願書を作成し、新

政府が東北諸藩鎮撫のた

めに派遣していた奥羽鎮

撫総督府に提出しました

が、この嘆願に断固反対

したのが世良でした。

「会津藩主・松平容保は

天にも地にも容れられない

罪人であり、即刻討ち入

るべし。」

と、その嘆願書に付け

札をして戻すとともに、

仙台藩・米沢藩に対し、

会津藩討伐の軍を進撃さ

せるよう厳達しました。

また世良は、嘆願書を

提出する仙台藩の重臣に

対し、多くの人が見つめ

る中で、侮蔑的叱責をす

るとともに、主君を辱め

るような言動もあったと

伝えられています。武士

の面目を失い、主君まで

辱めを受けた仙台藩士は、

ついに堪忍袋の緒が切れ、

福島宿において世良修蔵

を暗殺してしまいます。

な内容でした。

協議を重ね、会津藩の新

政府軍への謝罪降伏を

もって平和解決への道を

探っていましたが、この

事件が新政府への実質的

な宣戦布告となり、会津

藩救済のための同盟は、

新政府軍への攻守同盟と

なってしまうのです。

奥羽越列藩同盟の盟約

書は8カ条からなり、そ

の二つ目には「一、同舟

海を渡ることく、信を

もって居し、義をもって

動くべき事。」とあります。

また仙台藩が作成した東

北諸藩の行動計画の中に

は、「二本松藩は全兵力

で本道より先鋒で進軍」

とされていました。奥羽

の南に位置する二本松藩

にとっては、非常に過酷

な内容でした。

一本松藩はそれまで、  
一 仙台藩・米沢藩と



# 武器の差が勝敗を決す

**奥**羽越列藩同盟諸藩と新政府軍の戦力の差を如実に比較できる戦いがありました。慶應4(1868)年5月25日、白河の北東部で行われた「本沼の戦い」です。新政府軍は、敵の状況を偵察する斥候部隊20人、これに対し同盟側は、二本松藩と会津藩の合わせて200人の兵力でした。お互いに1時間ほど銃を撃ち合った結果、新政府軍側の損害が死者1人、傷者1人に対し、二本松藩は傷者1人、会津藩は死傷合わせて15、6人(『復古記』より)を出し、同盟側が先に撤退します。同盟側は10倍もの兵力を擁しながら、結果として新政府軍の優勢勝ちのようなものとなりました。このように、戊辰戦争全般において勝敗を決したのは、戦闘で使用された武器の性能の差によるものが大きかったようです。戊辰戦争の主武器は小銃と軽砲。ここではこのうち、小銃の性能の差について、簡単に紹介します。

## 戊辰戦争で使用された主な小銃の種類とその性能比較

	名称	形態	有効射程距離(m)	命中率	発射速度	現在の大体の換算価格		前装と後装の違い	
						銃1挺当たり	弾丸1発当たり		
劣 ↓ 優	奥羽越列藩同盟諸藩が主に使用した銃	(1) ゲベール	前装滑腔式	80~100	悪い	きわめて遅い	約100万円	自分たちで製造	前装は弾丸を銃口から入れる。この際、銃身を真っすぐに立てなければならぬ。弾を発射するまで10以上の操作があり、ややこしすぎる。
		(2) ミニエー	前装施条式	300~500	良い	遅い	約500万円	約7千円	
	新政府軍が主に使用した銃	(3) スナイドル	後装施条式	600~800	良い	早い	約1000万円	約1万円	後装は現在のライフル銃のように、弾丸を銃尾の弾倉を開けて装填し弾き金を引くだけなので、初心者でも簡単に操作ができる。
		(4) スペンサー	後装施条連発式	300~500	良い	きわめて早い	約2000万円	約1万円	

★(1)ゲベールの形態である滑腔式とは、銃身の中の弾丸が通る部分(以下「腔内弾道」という)が滑らかな円筒状になっているものをいう。銃口から弾丸を入れるため、当然入れる弾丸は銃口径より小さいものでなければならない。よって発射されても、弾丸が腔内弾道を上下左右にガタガタ揺れ動いたりしながら銃口から飛び出すため、標的が遠いほどズレが発生し、狙った所へは命中しづらかった。

★(2)~(4)の形態である施条式とは、腔内弾道の中に人工的にらせん状のミゾをつけたものをいう。ミゾがあることにより、(1)の滑腔式に比べ、命中率と飛距離が格段に向上することとなる。(以下にその理由を記載)

- ・弾丸はミゾに食い込んだままのかたちで腔内弾道を通るため、銃の中心線からずれずに発射され、命中率が格段に向上する。
- ・腔内弾道のミゾにより、弾丸にもらせん状のキズがつくことで、銃口から発射されてからの飛翔中の弾丸の周りの空気層に小さな乱流群が発生し、より大きな浮力が得られる。
- ・腔内弾道のミゾに沿って回転しながら弾丸が発射されるため、弾丸に揚力が得られ、飛距離もはるかに長くなる。滑腔式での無回転のときと比べると、飛距離は2~3倍となり、現在のゴルフボール表面のくぼみも、この理由により付けられている。

**奥**羽越列藩同盟諸藩は、主に上の表の(1)と(2)の前装式銃で戦いに挑みました。新政府軍が使用した後装式の銃は、戦場で寝たままでも弾の装填が可能だったのに対し、同盟諸藩が使用した前装式銃は、長い銃身(1.3~1.5m)を垂直にしなければ弾丸を詰め込むことができません。つまりこのことは、銃を撃つ人が弾を装填する際、立ち上がらなければならないことを意味します。

弾丸が乱れ飛ぶ戦場で立ち上がるということは、自殺行為です。立ち上がった瞬間に敵軍に狙い撃たれてしまうからです。よって前装式銃を使用する兵士たちは、様子を見ながら伏せたまま後退し、木陰などの手頃な遮蔽物まで行って弾丸を装填しました。銃の性能の差、そして銃を撃つまでに要する時間の差が、同盟諸藩にとっては致命的となりました。

【参考図書】数学者が見た二本松戦争(渡部由輝 著、並木書房 発行)

# 新政府軍の

## 進撃



**奥**州の玄関口白河。丹羽家2代当主・丹羽長重公が築いた総石垣造りの白河小峰城が、東北地方での戊辰戦争における戦略的重要拠点でした。古来より白河は関所であり、新政府軍にとっては、この地を得ずして会津を始めとする奥州に攻め入ることは難しく、また奥羽側の軍にとっては、この拠点を確保すれば奥羽全体への影響を左右することができ、白河は戦略的な重要地として両軍争奪的になりました。

慶應4(1868)年閏4月25日からの約100日間、白河争奪戦が繰り広げられます。この間の戦いのうち、奥羽側の軍が勝ったのは閏4月25日の緒戦のみで、その後は一度も城を奪還することはできませんでした。

特に5月1日の戦いでは、奥

羽側の軍は2,500人~3,000人、新政府軍は700人~800人の兵力でありながら、武器の違いが大きく影響しました。この日奥羽側の軍は歴史的な大敗を喫し、白河小峰城を奪われるとともに、死者300人余りを出しています。新政府軍の戦死者はわずか10人でした。

長引く白河の戦いの間、新政府軍の別動隊は6月24日に棚倉城、7月13日には磐城平城と次々に城を落とし、進軍を続けました。

➤ の状況を受け同盟各藩は、  
➤ 7月4日の秋田藩を皮切りに、戦況が思わしくないことを察知した本庄・天童などの諸藩が奥羽越列藩同盟から離脱していきます。

また、7月26日の小野新町の

戦いにおいては、二本松藩勢は三春藩が同盟を離脱したとは知らずに三春藩に救援を求めましたが、逆に三春藩は新政府軍を道案内してこれを包囲し、結果として二本松勢は多くの戦死者を出し敗走しました。

7月27日午前4時頃、新政府軍は三春を発し一路二本松城下を目指しました。このとき、白河の戦いに出兵していた二本松藩の主力部隊は、郡山の小原田や笹川などにおり、安達郡内には全くいない状況でした。二本松藩は全軍に対し城下防衛のため引き上げを命じましたが、各隊は各地に駐屯する新政府軍を避けての移動のため帰藩に難儀し、2日後の二本松城下の戦いにすら、遂に間に合わない部隊もありました。

# 降伏か



▲老臣会議図(古川 盛雄・画〜絵でみる二本松少年隊より〜)

# 決戦か

4月に開戦した白河の戦い以降7月27日まで、二本松藩の戦死者は1177人を数え、戦況は厳しくなる一方で、いよいよ新政府軍が二本松城下へ攻め入ることが目前となりました。

慶應4(1868)年7月27日夜、二本松城中では老臣会議が開かれ、降伏か決戦かで激しい討議が繰り広げられました。一旦は新政府への恭順、降伏に決しましたが、家老の丹羽一学が議論を制し、次のように言ったと伝えられています。

「三春藩信に背きて西軍を城中に引く。神人ともそれを怒る。我にして今、同じようなことをしたら、人これをなんというか。また、西軍に降つて一時的に社稷(国家)を全うしても、東北諸藩を敵にしたらいずれは亡ぼされる。すなわち、降伏しても亡び、しなくても亡びる。同じく亡びるなら、列藩の信を守つて亡びよう」

老臣会議の結果、二本松藩は新政府軍に降伏せず、徹底抗戦する決断をしました。これは、老臣一同この戦いが勝つ見込みがほとんどないこと、そしてそれにより領内が焦土と化すことが分かりきった上での

決断でした。会議では降伏論者も多くいましたが、結局は二本松武士としての誇りがそれをさせなかったのではないのでしょうか。

また、日本では将棋で取られた駒を相手が使うように、敵に恭順、降伏した場合、敵方の配下となり戦うのが戦国以来の常識でした。関ヶ原の戦いで、石田三成方として布陣していたながら徳川家康方に寝返った小早川秀秋が、石田三成の居城であった佐和山城を攻め落としたように、奥羽越列藩同盟諸藩でも新政府に恭順した秋田藩は庄内藩を、相馬中村藩は仙台藩を、そして三春藩は二本松藩を、新政府軍の部隊として攻めました。もし、二本松藩が新政府軍に恭順、降伏していたら、地理に明るい二本松藩は隣国会津藩討伐の先鋒となり出陣した可能性が十分ありました。老臣たちは列藩同盟への信義、そして二本松武士の誇りにかけて、新政府軍の手足となることだけは避けたかったのかもしれない。

一方、この決断は新政府軍も予想だにしていませんでした。新政府軍の討伐の矛先はあくまでも会津藩・庄内藩であり、二本松藩には何の恨みも無く、ただその進攻の通り

道であったにすぎなかったからです。加えて、このとき既に奥羽越列藩同盟加盟藩が次々に恭順、降伏しています。それなのに兵力もままならず、ここまで多くの犠牲者を出しながらも、なぜ二本松藩だけが一向に刀を収めようとせず、藩一丸となって立ち向かってくるのか。ちなみに7月28日は二本松藩の降伏を待ち、新政府軍は進軍しなかったといわれています。

老臣会議では、もう一つ重要な決定をしています。それは、藩主・丹羽長国公を逃がすということでした。長国公は病床にあり、また嫡子がいなかったため、何としても生きていただかなければいけない事情がありました。二本松藩にとって丹羽家は藩そのものであったため、長国公にもし方が一のことがあった場合は、藩の存亡にかかわるからです。長国公は「城が総攻撃を受けようとしているこの時に、我一人が生きるのは何とも忍びない。病気で私の命も長くは無い。皆と一緒に城を枕に死ぬ。」と言って、家臣を困らせましたが、長国公の病床で泣きながらお願いする家臣の勧めに最後は従い、翌日米沢へ向け退城しました。

# 最も長い1日

1868年7月29日



▲二勇士奮戦の図。正面上が、木村銃太郎率いる少年隊たちが陣取った大壇山で、小屋の前で奮戦しているのが、青山助之丞と山岡栄治の二勇士。(太田霞岳・筆 ~ふるさとの思い出写真明治大正昭和二本松より~)

## 慶

應4(1868)年7月29日。朝霧の中、

新政府軍は小浜と本宮の二方面から大挙して二本松に迫りました。軍事総裁家老の丹羽丹波率いる主力部隊も遂に帰藩することができず、帰藩できた部隊も、休養する暇もなく各地で転戦してきた疲労困憊の兵でした。この藩の存亡の危機という非常時にもかかわらず、藩の兵力は不足し、老兵、少年兵、農兵も参加しての城下防衛をせざるを得ない状況でした。

怒濤の勢いで進軍する新政府軍を、小兵力の二本松藩は支えきれぬわけもなく、守備していた城下防衛の重要地である供中口、大壇口は難なく破られ、あつという間に郭内、そして城内までの侵入を許すことになりました。

## 城

下戦においても、二本松藩と新政府軍との武器の差は圧倒的であり、銃砲の撃ち合いではまともに戦うことができない状況でしたが、二本松藩兵はそのような状況下においても、

城下防衛のために敵に接近して、槍や刀で必死に新政府軍に立ち向かいました。その一つとして、二本松藩史には薩摩軍の六番銃隊の隊長であった野津七次(のちの元帥陸軍大将・野津道貫)が語ったとされる、二本松藩士の青山助之丞と山岡栄治の戦いが記されています。

「本宮から二本松城下へ進軍中、大壇口のある茶屋の陰に隠れていた2人の壮士が、突然我が隊に切り込んできて、矢庭(「たちどころ」)に9人ほど斬り倒された。その壮烈な太刀風に圧倒され、全隊が退却したほどであった。2人の壮士は、最後には壮烈に斬り死を遂げた。」

2人の壮士は大壇口で戦った少年たちの撤退を助けたとされ、「大壇口の二勇士」と称されていますが、この他にも多くの二本松藩士が白兵戦(※)で斬り込みをしたと伝えられています。自らの命をなげうってでも、敵の侵攻を食い止めようとした二本松藩士の戦いぶり、後に新政府軍により伝えられることとなりました。

野津は、戊辰戦争の悲壮さを次の詠歌に残しています。うつつ人も うたる人も 哀れなり 共にみくにの民と思えば

一方、二本松城内では、一家老・丹羽一学、郡代見習・丹羽新十郎、小城代・服部久左衛門が自刃し、城を自焼しました。丹羽一学と丹羽新十郎は、藩を交戦に導いた主導者でもありました。また城の本丸でも、丹羽和左衛門、安部井又之丞の二人の老臣が自刃しました。和左衛門は新十郎の養父であり、和平論者であったようです。それぞれが藩を壊滅に追い込んだ責任を取ったものと思われま

城が落ち、二本松で最も長い1日が終わりましたが、二本松藩が降伏したのは9月11日で、会津藩が降伏する9月22日の約10日前のことでした。

### ※白兵戦とは

敵と接近し、刀や剣、槍などの白刃のついた武器を交えて戦うこと。

# 二本松少年隊



◀この写真は、少年隊の最後の生存者であった今村剛介翁(旧姓・武谷)にお願いし、少年隊として出陣した際の軍装を再現していただき、それを今村翁の孫(当時14歳)に着せて撮ったもの(昭和14年撮影)。翁は生前、次のような懐古談を残しています。

『少年たちは体が小さかったため、太刀を佐々木小次郎のように斜めに背負った者もあり、刀を抜くときは、友人に抜いてもらったり、2人が向き合ってお辞儀のように腰を折り、互いに相手の刀を抜いたものだった。』

『藩のため戦争に出て戦うことは、武士の子として当然の事であって、特に語るべきことではない。生まれながらにして、既に心に決めていた事だから、戦争に出ることになって恐ろしいとは思わなかった。出陣の前夜などは、今の子どもたちの修学旅行の前夜のようなはしゃぎようだった』

「本松藩には「入れ年」という独特の制度がありました。戊辰戦争における二本松の戦いでは、この制度と兵力不足の実情が重なりあい、多くの少年たちを戦場に赴かせてしまいます。後にこの少年たちは、『二本松少年隊』と呼ばれることとなります。

大壇口の戦いでは、少年隊の悲劇を生みま

した。大壇口に出陣した木村隊は、隊長の木村銃太郎、副隊長の二階堂衛守以外の25人は、全て12歳から17歳の少年たちで構成されました。

戦闘で隊長の木村は敵弾に打ち抜かれ、「この傷では到底お城には帰れぬ。わが首を取れ。」と副隊長の二階堂に伝え、二階堂は木村の首を切り落としました。その瞬間、少年達は一斉に号泣したといえます。そして、少年たちは泣きながら木村の屍(死体)を埋め、城に戻り最後の抵抗をすべく引き揚げることになりました。先頭は二階堂と岡山篤次郎(13歳)で、2人は木

村の首を、それぞれ頭髪を片手につかんでささげもち、大隣寺付近の道を急いでいました。その途上、新政府軍と運悪く遭遇し、二階堂がまず死傷し、岡山も腹部に2発の弾丸を受け、その場に倒れました。

その後、城は焼け落ち

た終了し、大隣寺付近の戦場整理をしていた土佐藩士が岡山の姿を認め、襟元に書かれた文字「二本松藩士 岡山篤次郎・十三歳」の「十三歳」に驚きます。藩士たちは、まだ息のあった岡山を城下称念寺におかれた新政府軍の野戦病院に搬送しました。土佐藩の小隊長・広田弘道は、死にひんしなからもうわ言で「無念」銃をくれ」などと発した岡山に心を動かされ、「この少年を引き取って養子にしたい。」と語ったと伝えられています。岡山は絶命し、

岡山は出陣に当たり、初めから死ぬことを覚悟していたようでした。「母が屍を探すときに分かりやすい

ように」と、戦場で着ていた服や手拭いにいたるまで、母に頼んで「二本松藩士 岡山篤次郎・十三歳」と書いてもらっていたとのことでした。

大壇口では戦いに参加した少年25人のうち、数え年13歳の少年を含む8人の少年が戦死しています。

※「入れ年」制度とは

二本松藩で成人としての扱いは受けるのは、数え年20歳でしたが、18歳になった時点で藩に成人した旨の届け出をすると、藩は兵籍に入ること命じる習慣がありました。つまり2歳のさばを読むことを黙認することで、これを「入れ年」といい、二本松藩独特の制度でした。7月27日の本宮占拠を受け、藩では兵籍を15歳まで許可、「入れ年」になると13歳までが対象となりました。少年隊士は62人で、うち戦死者は14人を数えます。





二本松藩主・丹羽家18代当主  
にわ ながとし  
丹羽 長聰 氏

東京都在住で元会社役員。現在の主な役職は次のとおり。

- ・二本松市地方創生アドバイザー
- ・東京二本松会会長
- ・二本松史跡保存会名誉顧問
- ・福島県城下町連絡協議会名誉顧問
- ・二本松藩睦会名誉顧問
- ・東京福島県人会常任相談役

顕彰祭、墓前祭には出席させて頂いております。  
さて、戊辰戦争を考えると、当然ですが国元・二本松のことが脳裏から離れません。いろいろな考え方があ

## 東北における 戊辰150年を想う

**去**年の春先からでしょうか。全国的に、今年の戊辰戦争から150年目の節目の年が話題となり、私のもとにも数々の行事案内が舞い込むようになりました。私も手元の戊辰戦争関係の資料を改めて確認するとともに、当時の二本松に想いを巡らせました。

私が国元・二本松へ足を運ぶようになったきっかけは、東北戊辰戦争100周年の行事に初めて出席させて頂いてからです。場所は失念いたしました。が、市内の学校の講堂で100人以上の方々がご出席されていたと思います。そして、出席されていた方々から、「殿様が来てくれてとてもうれしい。」と歓迎して頂いたことを記憶しております。それからというもの、勤務先の理解もあり、毎年欠かさず二本松少年隊

東北地方における戊辰戦争については、東北で一番力のあった仙台藩が、他藩の状況を見ながらの姿勢であったため奥羽列藩の足並みがそろわず、力をついに結集することができないままに、奥州路の玄関口である白河に各藩から出兵し、戦わざるを得ない状況でありました。一方、西軍はその裏をかき海路常磐平潟港へ上陸し、県南地方を陸路・海路から攻略しました。退路を断たれた東北各藩の藩士は、バラバラになり組織的な攻撃ができず、それにも増して当時の貧弱、かつ旧式の武器ではとても立ち向かえず敗走を余儀なくされました。

しかしながら、私は、二本松藩士は義に殉じて徹底抗戦を貫いた「東北の誇り」であると思っております。

本年、戊辰150年を迎えるに当たり、改めてこの戦争で命を落とされた方々に、心から「冥福をお祈り申し上げます。」

なくされていた藩主・丹羽長国公は、9月11日に降伏嘆願書を奥羽鎮撫総督に提出、受理されています。その後9月16日に帰藩命令があり、21日に帰着し大隣寺にて閉居謹慎、翌月上京を命じられ、26日に前橋藩邸にて謹慎、戦犯の御沙汰を待つ身となります。そして長国公は11月5日、官位を剥奪され旧江戸藩邸没収を宣告されました。

しかし幸いにも12月26日、長国公が隠居し米沢上杉家より養子を迎えることを条件に家名が存続し、旧領のうち5万石および二本松城を預けられたことで、再び二本松藩が成立するに至っています。

二本松藩が消滅するのは、廃藩置県詔書が發布された明治4(1871)年7月14日のことでした。

## 落城後の二本松藩と丹羽家

**戊**辰戦争勃発150年を迎えました。“もう150年”“まだ150年”、歴史の感じ方は人それぞれでしょう。多くの方は、二本松城落城をもって二本松藩降伏、そして二本松藩消滅とされているかもしれませんが。しかし7月29日の城内戦で、三の丸御殿などを自焼し落城したものの、戦いは二本松城奪還戦として続いたのです。8月17日、二本柳で戦闘を展開、西軍の猛攻により5人の戦死者を出し撤退しています。8月19日には玉ノ井村山ノ入で戦闘、翌日母成峠で戦闘、防戦の末に支えきれず敗走、合わせて8人の戦死者を出した結果、二本松藩の戦いは事実上終わりを告げました。

一方、米沢で避難生活を余儀



二本松市文化財保護審議会委員  
ねもと とよのり  
根本 豊徳 氏

双葉郡双葉町生まれで、現在は市内若宮に在住。東北学院大学文学部史学科で考古学を専攻し、卒業後に福島県教育庁文化課に入庁。その後二本松市役所へ入庁し、社会教育課、生涯学習課などを経て、文化課長を務めた。

戊辰戦争における二本松藩の戦死者は、老兵、少年兵、農兵等を含め、337人。戊辰戦争後の二本松は賊軍の汚名を被りながら、その後の明治・大正・昭和の時代を送らなければならなかったことは事実であり、平和的な解決ができなかったことが、大きな過ちであったという考え方も多くあります。

一方、この戦いはやむに<sup>ゃ</sup>已まれぬ事情により行ったものであり、二本松藩は徳川家、そして奥羽越列藩同盟への信義を貫き、それぞれが二本松武士としての誇りを捨てることのない、崇高な精神に基づく戦争であったとの考え方もあります。

極限の状況の中、二本松藩が下した決断は正しかったのか、間違っていたのか。

戦争では、勝者と敗者が決しますが、歴史の多くは、その勝者によって作られてきたといえます。戊辰戦争で、二本松藩は敗者となりましたが、今、この地で生きる私たちは、改めてこの戦争を見つめ直すとともに、郷土のために戦った彼らの精神や思いを胸にとどめ、これから先も後世に伝えていかなければならないのだと思います。

本年11月3日、市では戊辰戦争で犠牲になられた337人とこの地で亡くなられた方々の慰霊祭を執り行います。貴い先人たちのご冥福をお祈りいたします。

X  
丹羽  
二本松藩